

# 地域の互助協同と高度経済成長

Inter-Regional Cooperation and High Economic Growth

田中宣一

TANAKA Sen'ichi

はじめに

- ① 人—自然のかかわり
- ② 互助協同という民俗
- ③ 自然の利用
- ④ 猛威からの防禦

おわりに

## 【論文要旨】

人は他の人や自然、神とのかかわりのなかで生きているが、第二次産業が牽引した高度経済成長の影響を強く受けたのは、そのうちの自然とのかかわりであった。そして自然と深くかかわる生活を送ってきたのは第一次産業従事者であるため、彼らの自然への対応を中心に、高度経済成長が影響を与えた地域の互助協同という民俗の変化を考える。

自然とのかかわりには、その恵みを利用しようとする場合と猛威を防禦しようとする面とがある。いずれにも互助協同は欠かせない。恵みの利用には、山林資源の伐採加工や田畑の開墾と作物の収穫、漁業資源の採捕、湧水の確保や流水の利用などさまざまある。そのうち山林資源の利用は、高度経済成長に伴うエネルギー革命によって薪炭生産が衰退したために様相を大きく変え、農山村部の過疎化を招いてしまった。平地農村部や漁村部においても、大型農機具の普及や漁船漁具の改良によって生じた余剰人口の都市部への流出が進んだ。逆に経済活性化によって新たに施設園芸や養殖漁業が発達し、自然へのかかわり方に変化が生じた。これらに伴って、人力を多用してきた第一次産業から互助協同する作業が少なくなったのである。一方、猛威の防禦としては、洪水、火災、日照り・旱魃、野生鳥獣類などから生活や生命を護る必要がある。これら猛威にひとりで対峙することは困難なので、各地にはさまざまな互助協同の慣行が伝承されてきたが、高度経済成長期以降は機械力が人力に代わるとともに、国や自治体も次第にこれらの対策に力を入れるようになって、それまでの地域の互助協同は後退していったのである。

互助協同の機会が少なくなったことにより、地域社会から互助協同の精神が薄れていったのは必然である。現在よく言われる人間関係の稀薄化は、高度経済成長期に進んだ互助協同後退の影響が徐々に及んできているからではないだろうか。

【キーワード】 高度経済成長、互助協同、民俗変化、第一次産業、自然への対処